

## 01-043

## 自閉症スペクトラム診断経過にある子どもをもつ母親の不安感とソーシャルサポートとの関連

相木 恵美<sup>1)</sup>、上山 和子<sup>2)</sup>、金山 時恵<sup>2)</sup>倉敷成人病センター<sup>1)</sup>、  
新見公立大学大学院看護学研究所<sup>2)</sup>

**【緒言】** 自閉症スペクトラム児は、診断が確定するまでの経過が長期に渡る傾向があり、母親は診断経過中に不安や困難を抱え、不安を軽減するための支援は重要な課題である。

**【目的】** 本研究では、自閉症スペクトラム児の主な養育者である母親の診断経過の不安とソーシャルサポートとの関連性を明らかにし、必要な看護支援を検討することを目的とする。

**【方法】** 1. 研究デザイン：横断研究。2. 研究対象者：健康診査や保育所、幼稚園で指摘を受け、自閉症スペクトラム診断中の3歳から4歳児を主に養育している母親106人。3. 調査内容：基本属性、発達障害児・者をもつ親のストレス尺度（以下、DDPSIとする）、診断感情体験尺度、心理的ストレス反応尺度、育児ソーシャル・サポート尺度を用いて調査をした。4. 分析方法：統計ソフトHADを使用し基本統計量を算出した。DDPSIと各尺度との相関関係をSpearman相関係数を用いて分析した。ストレス反応とソーシャルサポートは階層的重回帰分析を用いて関連性を分析した。5. 新見公立大学倫理審査委員会（承認番号154）および所属機関倫理審査委員会（承認番号434）の承認を受け実施した。

**【結果】** 106人に配布し63人から回答が得られた（回収率59.4%）。母親の年齢は30歳から39歳が最も多く第1子をもつ母親であった。自閉症スペクトラム診断経過中の子どもをもつ母親のストレスとしてDDPSIの項目では、「将来自立への不安」 $25.6 \pm 5.12$ と最も高かった。診断感情体験尺度では「不安ショック」 $15.59 \pm 7.78$ が高く、心理的ストレス反応では「抑うつや不安」 $7 \pm 5.13$ が高かった。DDPSI得点と心理的ストレス反応得点との相関は（ $r = .21-.54$ ）で有意な正の相関、DDPSI得点と診断感情得点との相関は（ $r = .14-.57$ ）で有意な正の相関がみられた。心理的ストレス反応得点と育児ソーシャルサポート得点では居場所作り（ $r = .30-.43$ ）で有意な正の相関、育児ヘルプ、精神的サポート（ $r = -.18-.35$ ）では有意な負の相関がみられた。

**【考察】** 母親は、就学時期を迎え集団生活に適応できるかなど子どもの将来に不安を感じ、ストレスの中で「将来・自立への不安」が高かったと考える。自閉症スペクトラム診断経過における母親への支援として居場所づくりと診断が行われる外来において常にサポートできる外来看護師の配置が必要であることが示唆された。

## 01-044

## 知的障害児の動作模倣バイバイの特徴

松井 学洋<sup>1)</sup>、中井 靖<sup>2)</sup>、高田 哲<sup>3)</sup>関西学院大学 教育学部<sup>1)</sup>、  
宮崎大学 教育学部<sup>2)</sup>、  
神戸市総合療育センター<sup>3)</sup>

**【はじめに】** 自閉スペクトラム症（ASD；Autism Spectrum Disorder）では中核症状として模倣能力の障害が挙げられているが、知的障害児（ID；Intellectual Disability）でも模倣の遅れが指摘されている。今回、乳幼児に幅広く観察される動作模倣「バイバイ」に着目し、出現時期と手の動かし方をASDの有無を含めてID、定型発達児（TD；Typically Development）と比較し、ASDの合併が模倣能力に与える影響を調べた。

**【対象】**

DSM-4に基づき、医師から精神遅滞と診断された幼児74名（ $4.0 \pm 0.8$ 歳、ID群）を対象とした。その内、自閉性障害ではない他の症候群に伴う精神遅滞と診断された36名をASD-（ $3.8 \pm 0.6$ 歳、知的障害単独群）、精神遅滞を合併した自閉性障害と診断された38名をASD+（ $4.3 \pm 0.8$ 歳、知的障害・自閉性障害合併群）とした。TD群との比較では、健診で医師から定型発達を示すと判断され、バイバイの模倣を認めた乳幼児61名を対象とした。

**【方法】**

ID群の母親に質問紙を用いて調査時年齢でのバイバイの有無、手の動かし方、初めてバイバイを模倣した月齢を調べた。TD群の母親には、調査時点でのバイバイの手の動かし方と初めてバイバイを模倣した月齢を質問した。各群の手の動かし方の違いは $\chi^2$ 検定を用い、バイバイの開始時期の差はMann-Whitney U検定にて各群での有意差を求めた。

**【結果】**

1. ID群のバイバイの出現月齢は平均 $27.2 \pm 14.0$ か月であり、TD群より18か月有意に遅かった。ASD+の出現時期は平均 $31.2 \pm 14.9$ か月であり、ASD-の平均 $23.7 \pm 12.3$ か月と比べて8か月有意に遅かった。
2. ID群のバイバイの手の動かし方は、「手の平を自分に向けて横に振る」33%、「手の平を相手に向けて横に振る」22%、「手首を上下に振る」37%、「手首を回転させる」8%であり、TD群より「手の平を相手に向けて横に振る」が有意に低く、「手の平を自分に向けて横に振る」が有意に高かった。
3. ASD+は、TDより「手の平を相手に向けて横に振る」が有意に低く、「手の平を自分に向けて横に振る」が有意に高かった。一方、ASD-とTDとの間に有意な差は見られなかった。

**【まとめ】**

バイバイの出現時期は知的発達と関連することが示唆された。また、ASDの合併がバイバイの出現時期と手の動かし方の模倣に影響を与える可能性がある。